

# いの流水俳壇

## 「当季雑詠」

松尾 満津於選

里山の透けて行く日々大根干す

刈谷 志津

(評)大根は漬物にするために、旬日に亙って干すこともあり、葉を束ねて藁で縛って竿に掛けて干す懸大根、或は皮をむいて短冊切りにして縄や藁で吊して干大根とする場合がある。この句は前者と後者或は両方共の情景があるのかも知れない。ともあれ晩秋から冬季にかけて頃の農村に一番身近な野菜、大根の最終の処理状況が伺い知れる句。

銀杏の葉拾いて未来へ夢多き

片岡 包女

(評)何気ない、かりそめの所作をよどみなく表現し、その印象を見事に眼前にした句のように見受ける。俳句の特性を信じ無心になる心根がなければ、生れない

作品ではなかるうか。作句の俳句らしき根本の意を、垣間見たおもひがする。銀杏の葉に託した作者本来の夢、思いは何であろうか。説明のできない部分を作者と共に、無言で頷き合うより他に仕方のない句のように思える。

食卓の色へ一つの柿を剥く

大川 節弥

(評)食卓の料理の中に加えた彩りのため、柿一個である。作者は食味に加えた色彩との調和が、欲しかったのである。食卓の味に料理の豊かさが醸し出される平和な一時。

秋時雨傘をたたみて予約席

伊藤 萩甫

(評)時雨は晩秋や早春にも降ることもあるので、これは特に「秋時雨」「春時雨」として区別することになっている。陰暦十月は時雨月といはれ一番時雨が多い。朝時雨、夕時雨、小夜時雨、村時雨、片時雨など。「時雨傘」では季節は特定されないで、原句に手を加えました。御諒承下さい……。

裾分けの隣も一人乗の飯 岡本とも子

辛寿まで五年五年の日記買う 友草 水月

立冬というたしかな朝卵割る 間 浩太

秋思ふと人生半ばとうに過ぎ 井上 郁子

遅れじと持ち替えし杖紅葉坂 津田 久美

茶の花や夕日の溜まる山の畑 竹崎 光子

千の風にのりて行きしか花野越え 中野 好子

終バスの座席にひとり冬の雲 川村 博子

神詣で色どり道の冬麗 弘瀬うき子

石路の花古稀の体を勇気づけ 森岡 照月

競り声や行き交う指の秋鯉 筒井 一平

猿群て夕暗迫る秋の風 筒井 正子

寒椿志士脱藩の道すがら 松尾満津於

### 次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

### 投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

## 今月のこども川柳

ご飯をね もりもり食べる 秋らしい

川内小6年 古谷ひなの

秋深し 木々あざやかに かそり道

神谷小6年 坂本 志織

もみじく 夏の終わりの サイレンド

下八川小6年 津賀 昂大

冬の空 みんなであそび 元氣よく

川内小5年 西村麻妃呂

音楽会 なかよくやれば 大成功

枝川小5年 田中 愛深

きのこ狩り 山へ行たら 竹ばかり

枝川小5年 森下 新大

さむい日に 雨がたらら よけさむい

川内小4年 隅田 慧瞳

きれいな もみじを見て 落ちて着くよ

下八川小4年 柿内ひろき

※「こども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。たくさんのご応募をお待ちしています。(応募は学校を通じてお願いします。)